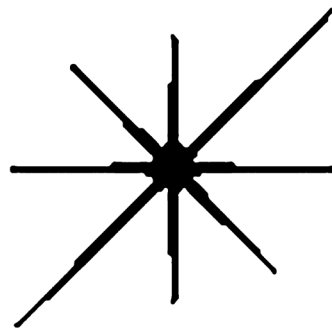


# コメット通信 38

[’23年9月号特別付録]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

# 夜なき夜

—旅のみやげ7

野村喜和夫

以下は、いまから20年近く前の、2005年2月初旬のある日の夜に、私の身に起こったことすべてである。

その日、母が危篤になったからすぐ来るようにと、姉から携帯に連絡が入ったのは午後遅く、私がまだ勤め先の、といっても週に一回、非常勤で出講しているだけの都心の某女子大にいて、ちょうど4時限目の授業を終え、教員室へ戻る途中だった。私が担当していたのは文芸ライティングコースの「日本語作詩法」という科目で、その日は冬学期最後の授業にあたっていたため、学生から集めた大量の作品をかかえていたが、けたたましく着メロの鳴った携帯をポケットから取り出すときに、あやうくそれらを床にばらまきそうになった。いや、作品の束のなかから、一枚の小さな紙片が抜け落ちて、ひらひらと舞いながら廊下の床に落ちたのだった。それを視野の片隅で確かめながら、携帯を開き、耳に当てた。私の「もしもし」よりも早く、切迫した姉の声がひびいた。

「お母さんが危篤になったから、すぐ来て」

「すぐって、まだ大学だから、一時間はかかるよ」言いながら紙片を拾い上げる。

「まあそれくらいはもつと思うけど」急に声のトーンが落ちた。危篤とはいっても、じつはまだあまり切迫していないのかもしれない。

紙片はとある学生の遅延証明書だった。遅刻したその女の子は、授業の終わりに、教壇の私までそれを届けにきたのだが、すこし大股の、まるでためらいがちにつま先を伸ばしていくような歩き方で、それを目にした瞬間、私は記憶になにかしら閃光をあてられたような気がして、はっとしてしまった。

廊下から中庭に出たとき、閃光の理由がわかった。彼女の歩き方は、むかし私がつきあっていた女とよく似ていたのだ。高校のひとつ後輩にあたり、20歳の私のはじめて抱いた女、そしてそのあとぼろ切れのように捨てた女だった。

学生の顔は？ それがついさっきのことなのに、よく思い出せないのだった。遅延証明書を受け取るとき、たしかに一瞬眼と眼を合わせたような気がするのに、その女子学生が目鼻立ちがどうしても像を結ばないのだ。たぶん閃光のせいだろう。もしかしたら、顔まで似ていたかもしれないのに。

中庭から教員室に戻り、学生の作品の束を鞆に収めると、教務の女性にそそくさと挨拶をすませて外に出た。母はすでに2日前から昏睡の状態にあり、それなりの覚悟はしていたが、さすがに来るべきものが来たという心のさざ波が、胸郭のほうまで打ち寄せてくる。何か大きなイベントに赴くような気分だ。駅までの街路を歩きながら妻に携帯で連絡を入れてみたが、応答がないので留守録メッセージを残し、それから電車で飛び乗って、都心から30キロほどの、埼玉県入間市というところにある生家の近くの、母が入院している病院に駆けつけたのだった。

ところが、病室に入ってみると、先に来ていた父や姉が退屈をもてあましたような顔をしている。ベッドを覗くと、母は、意識こそないものの、落ち着いた呼吸を続けており、どうやら今夜ぐらいは持ちそうな感じだった。

「ずっとこんな感じ？」

「そうなのよ、危篤ってお父さんが言うから、飛んできたんだけど」もうすでに少し疲れたというよ

うな顔で姉は答えた。

「年寄りはいたいこうなんだ」と父のしゃがれ声がつづき、最近死んだ近所の老人の例を引き合いに出した。危篤だといわれて家族が駆けつけると、当人は持ち直す。そういうことが二三度つづいて、いい加減家族がうんざりしてきたころ、ようやく逝ったのだという。

ベッドの傍の心電図のモニターもずっと一定の波形を描き出している。ふつう、臨終が近づくとその波形が乱れるのではないか。私は思い出していた。以前、まだ50代で食道ガンに倒れた父方の叔父の最期を看取ったときのことだ。臨終の少し前、血圧がどんどん下がり始めて70を切ったあたりから、それまでほぼ一定の間隔で波打っていたラインが、まるで叔父の心の最後の動揺、いま生が断たれようとしていることへの納得のいかない最後の問いかけをあらわすかのように、乱れに乱れて上下動の激しいジグザグを描きはじめたのである。時間にして数分、多く見積もっても5分ぐらいのことだったろう。それからすぐ、そのジグザグがうそのように、残酷にも波形は一本の直線になった。

母もそうなるのだろうか。ならないような気がする。母の場合は生が断たれるという感じではないし、いわば本人とも相談の上でゆっくりゆっくりと死は準備されてきたのだろうかから、心の動揺などというものともう縁が切れているはずだ。だから心電図の波形が乱れるわけがない。いや、臨終の瞬間さえそう簡単には来ないだろう。齢80ということもあって、危篤から臨終までの時間は、さっきの父の話にもあったように、暮れなずむ夏の夕暮れのように長いにちがいない。

そんなわけで、念のため姉だけ病室に残って一晩母に付き添うことにし、私は年老いた父を生家まで送りがてら、そのままそこで待機することにした。

その父と食堂で少し酒を酌み交わしたあと、家政婦が用意したかんたん夕食をとり、私は二階に上がった。父が涙ぐんで母の思い出などを語るので、なんとなくいたたまれなくなってしまったということもある。二階にはむかし私が使っていた部屋があって、引き戸を開けて中に入ると、ふだん人が住んでいないせいか、寒々しさを越えて、どこか荒涼とした雰囲気を感じられた。畳の床も歩くとざらざらする。私は暖房もつけないまま、部屋の奥の書架まで歩み寄り、捨てずにとってある古い雑誌や本の類を、それなりのなつかしさをもって手に取ったりした。そのなかに、『アサヒ芸能』臨時増刊「男と女のスクandal事件簿」というのが何冊もあり、なんでこんなものをもっておいたのだろう、自分でも訝しく思いながら、だがたちまち、その黄ばみを帯びたページに引き込まれてしまった。ほとんどページ毎に情事があり、強姦があり、殺人があった。エリート社員も貞淑な人妻も、みな最初はふと魔が差したように、しかし途中からはずみがついてもうこのコースしかないというように、愛欲の淵へところがり落ちてゆくのだ。かつて私は、まさかそれを種にして小説でも書こうとしたのだろうか。『ボヴァリー夫人』だって、もともとは新聞の三面記事から想を得たものなのだ。実のところはしかし、私は詩を書いて詩人になり、本気で小説に取り組むということはついぞないまま、今にいたっている。

そこでようやく茫漠とした年月の流れを感じ取ったような気分になり、ふと時計をみると、まだ8時をちょっとまわったところで、なんだか今夜は時間の経つのが妙に遅いなど、埃で汚れてしまった手指を見ながらぼんやりと思った。死に臨んでいる母が、時間を間延びさせているのだろうか。そして静かだ。こんなに静かな夜を過ごすというのも実に久しぶりのような気がした。部屋の隅のほうで、静寂そのものが埃として降り積もりつつある感じだ。まるで海底にプランクトンの死骸やらなにやらがゆっくりと時間をかけて沈むように。ならば、もうすこし酒でも飲もうか。

ふと視線を書架の脇の窓に移すと、夜の闇を背景に私の顔が映っていた。それはあたりまえだが、次の瞬間、その隣に、もう四半世紀以上もまえに別れた女——そう、さきほど大学で、閃光をあてら

れたように記憶に呼び戻されたあの女の顔が浮かび上がった。強く意識して思い出そうとしたわけではないのに、いつもまぶしそうにしていた目尻、小鼻の細くすぼまった感じ、やや下唇のほうが厚くて前に出ている口元など、細部までひどく鮮明に、まるでほんとうに窓の向こうから私をみているみたいに、数秒ほどそれは浮かんでいた。もちろんすぐに薄れていったが、よりによってこんな晩に、いったいどうしたことだろう。あるいはひょっとして、これが無意志的想起というやつだろうか。

いや、無意識の反映かもしれない。私はふと、「裏箔のない鏡」という言葉を思い出した。アンドレ・ブルトンとフィリップ・スーポーによる、記念すべき最初の自動記述的な作品『磁場』の冒頭の章が、その言葉をタイトルにしている。「裏箔のない鏡」というのは、おそらく自動記述それ自体のメタファーであって、昼のあいだは透明な窓が、夜になると裏箔のない鏡のようになって、そこに部屋の内部を映し出す、ちょうどそのように、自分たちの自動記述も、昼のあいだは見えない無意識を映し出すことになるはずだ、ということだろう。

窓から離れ、もう一度像を結ばせようと今度は意識して女の顔を思い出そうとしたが、さきほどのようにはうまくいかない。だが、ひとつの思いだけは残った。もしも私にも臨終のときに訪れて、最後にまぶたに浮かぶ顔があるとすれば、それは——私には子供がないので——妻や母の顔、父や友人たちの顔ではなくて、もしかしたら四半世紀以上もまえに別れたさきほどの女の顔ではないか。

まさかそんな。もうすこし酒を飲もう。つよくそう思って階下に降りると、食堂の明かりが消えていて、父はもう寝静まったらしい。こんな日はおとなしく一人で飲みながら待機するものだろうが、なんだかそれも気がすまない。私はふと思立って生家の外に出た。

さきほど連絡が取れなかった妻に再度発信すると、今度はつながったので、母の容態を伝え、今夜は生家に泊まることになるだろうと付け加えた。

夜間の郊外はさすがに冷える。もう氷点下に近いのだろう、雑木林のへりの土の上を歩くと、かすかに霜柱を踏む音がした。空を見上げると、はるかオリオンの三連星から、冷気に満ちた星の匂いが届いてきそうだった。月は見当たらなかった。

そうして夜の田舎道を10分ほど歩くと、とある私鉄の駅へと続くさびれた商店街が見えてきた。さてどこで飲もうか。ふだんの生活圏ではないので、行きつけの店は全くない。ただ、どこかこのあたりに、半年ほど前の小学校の同窓会の二次会に、地元の同級生たちに連れて行かれた「京子」という名のカラオケスナックがあったはずだ。そう見当をつけて歩いていくと、その通りに難なく見つかった。「京子」といっても、たしか京子という名のママではなく、ではなんという名前だったか、思い出せない。ほかにホステスがひとりふたりいて、こっちが酔っていたせいか、土偶のように腫れぼったい顔をしていた。

今夜もあの顔に出会うだろうか、などと思いながら、重い木製の扉を押して中に入っていった。おお、なつかしい。薄暗い店内にはカーペットが敷き詰めてあり、カラオケ用のテレビやマイクスタンドを中心に、臙脂色のベルベットを張ったボックス席が配置されていた。いつだったか、同じ埼玉の深谷かどこかの、保険金殺人の舞台となったカラオケスナックがテレビに映し出され、店のオーナーでもある容疑者の男が虚勢を張ってふんぞりかえっていたが、その男の肩越しにみえたのとそっくり同じ臙脂のベルベットだ。いまだきこんな内装も珍しいのではと、同窓会るとき同様に思いながら、私はその隅に腰を下ろした。背もたれのあたりから時間の脂が滲み出してきそうだった。

ほどなくして、店のホステスとおぼしき女性がやってきた。キャンドルで照らされた彼女の顔は、土偶ではなく埴輪だった。

「どうも」と私から馴染みのように声をかけると、

「あ、どうも」と一瞬当惑したような顔になり、それから、  
「おひとり？」と業務用のコードに戻った。たしかに、よほど近所の常連でもないかぎり、こんなところに一人では来ないだろう。

私は水割りを注文した。いったん女はカウンターの方に戻り、それから水割りのグラスと氷の入った容器をもって戻ってきて私の隣に座った。とびきり若くもなく、とびきり美形でもない。ただ、下方から射すキャンドルの光の加減なのか、女の頬の片面だけが明るく照らされて、一瞬、大げさに言えばまるでジョルジュ・ド・ラ・トゥールの絵に描かれたマグダラのマリアのようにみえた。埴輪から泰西名画へ、さらなる進化だ。

そのついでにあたりを見回すと、客は私のほかに数人いて、互いに顔見知りのようだったが、にぎやかに談笑している風でもなく、かといって入れ替わり立ち替わりマイク前に立つというのでもなかった。あるいはすでにひとしきり歌い騒いで、ひと休みしているのかもしれない。そのほうが静かなのでふつうなら助かるところだが、その日の私はなぜかまわりが騒がしくノイズにみちていることを欲した。というのは、「おひとり？」に頷いたきり、ホステスとは何も話すことがなく、私の席の沈黙がひとしきり浮き立つように思われたからだ。一杯目をあつというまに空にすると、ホステスは二杯目を作りながら、「何か歌いません？」と水をむけてきた。同窓会ときは、たしか私は、井上陽水の「リバーサイドホテル」を、音程を外しっぱなしに絶叫した。しかし、母親の臨終を待ちながら歌う歌なんて、果たしてあるだろうか。二杯目になっても相変わらずしきりとグラスを口に運ぶだけの私にあきれたのか、女はいつのまにか私の隣からいなくなっていた。

そうして私もいつのまにかうとうとしてしまったらしい。どのくらい眠ってしまったのか、気がつくと店内は一段と静かになっていた。まず、さきほどの数人の客がいなくなっている。夜も更けてみんな帰ってしまったのだろうか。そうだとすれば母が危篤だというのに、こんなところでいつまでも酒を飲んでいるわけにもいきまい。そう決めて、勘定を頼もうと首を伸ばし、カウンターの方をみると、従業員の姿がない。たしかホステスが二人とママさんらしき別の女性がいたはずだが、と私は訝しく思いながら立ち上がり、カウンターまで行って確かめることにした。けれども、カウンターの中、カウンターの奥のキッチン、どこをのぞいても誰の姿もみられない。まさか私を残して従業員まで帰ってしまったわけではないだろうな、とそんなばかばかしい思いつきそれ自体に苦笑しながら、そのときはじめて、カウンターの隣の奥まったところに上り階段があることに気づいた。そうか二階にいるのか。階段の下は段ボールやら何やらで足の踏み場もないほどだった。それをよけて身をよじらせるようにしながら、

「すみません、すみません」と私は踊り場の暗がりに向けて声を送った。しかし一向に応答がない。私はとうとう階段を上り始めた。踊り場で体の向きを変えると、二階がみえた。ドアが半開きになっていて、そこから光が洩れていた。それに誘われる蛾かなにかのように、私は残りの階段を駆け上がった。

ドアを開けると、朝のような明るさ、というかまばゆさだった。光源がどこにあるのか探そうとしたが、逆光でみえにくく、思わず手をかざしたりしてみた。だが、光が正面脇の窓の方から射し込んでいることはあきらかだった。つまり陽光だ。まさかそんな。めくるめくような思いにとらわれながら、私はあたりを見回した。何か仕掛けがあるにちがいない。

客は奥のほうのボックス席に若者らしき男がひとり、本を読んでいるのだろう、こちらに背を向けてうつむき加減にすわっているだけで、空間は全体にがらんとしている。インテリアは黒のモノトーンで統一されている感じだ。そのせいで光が余計に強調され、差し込む外光の帯には、埃の粒子の舞

うのが見えてさえいるかのようだ。そうした店内にどこか既視感があるのを訝しがりながら、私は歩き始めた。すこし床がぎしぎしして、その音に男が私のほうを振り向いた。ゆっくりとスローモーションのように。逆光なので顔のシルエットだけが浮かび上がるが、やはり若者だ。たばこの煙がそのシルエットと戯れ、逆巻いているようにみえる。彼はすぐに向き直り、うつむいて本をまた読み始めた。

店のBGMが聞こえてくる。モダンジャズだ。学生の頃よくモダンジャズを聴いた私には、それがハービー・ハンコックの「処女航海」のテーマ部であることがすぐさまわかった。たまたまなくなつかしい。スローテンポなリズム構成をバックに、トランペットが、あのまさに冒険に乗り出すときの、不安と期待の交錯を音にしたようなメロディーを吹いている。それに押されるように、私は若者の席を通り過ぎて壁際に達し、そこで振り返った。

もう逆光ではない。若者がもう一度本から顔を上げて私をみた。私だった。昔の長髪の私だった。そのときになって私ははじめて思い出していた。そうだここは、この喫茶店は、20歳の私がある女の子とはじめてデートをした場所にちがいない。いきなりそんな場所に身を置いていることをわれながら不思議に思わないのが、不思議といえば不思議だった。

「やあ」と私は声をかけた。昔の私は黙ってうなずき、私をしげしげとみた。別段驚いた様子もなく、迷惑そうな表情も浮かべていない。たぶん彼のほうでも、あたりまえのように、50過ぎの私の顔に未来の自分を認め、そしてそれ以上のことはまだあまりよく考えられないのだろう。

「ここ、いいかな」

昔の私の座っている長椅子を指さしてたずねると、昔の私は何も答えずに長椅子の奥の方に腰をずらし、一人分のスペースを作った。こうして私は昔の私と同じ席に並んで腰をかけた。いつのまにコートを着たのか、尻がその裾を窮屈な感じで踏んでしまったので、それを外して座り直した。対面の椅子にしなかったのはなぜだろう、自分でもよくわからなかったが、たぶん私と昔の私との関係は、顔を面と向き合わせるよりも、同じ方向を向いてお互いの顔をあまりみなくても済むような座り方のほうがしっくりいくと思えたのだろう。

私たちはしばらくのあいだ何も話さなかった。何から話していいのか見当がつかなかったし、なにしろ私と昔の私とのあいだには、空間的にはいまほとんど体を接しているが、時間的には四半世紀以上のへだたりが横たわっているのである。

死に臨んでいる母が、今度は時空の場に歪みをつくり出してしまったのだろうか。私はふと、以前どこかで読んだことがあるSFのショートショートを思い出した。記憶が曖昧になっているので、私の創作も混じっているかもしれない。主人公は孤独な少年である。クラスの仲間とも打ち解けることができない。あるとき彼は、トンボの飛ぶ校庭でひとりブーメランを拾い、それを、孤独そのものを投げるように、思いっきり遠くへ投げた。するとブーメランは、そのまま空の奥に吸い込まれてしまった。そんな馬鹿な。しかし少年は、ブーメランが戻ってくることを諦めて校庭を去り、同時に、こんなつまらない惑星からも去ってしまいたいと思った。それで宇宙飛行士になり、念願かなって惑星を飛び出し、光子ロケットで未踏の宇宙をめぐった。英雄になって帰還した彼は、なつかしい母校を訪れ、再び校庭に立つ。地上ではもう50年以上が経っているはずである。そういえばあのとき、ブーメランを飛ばしたなあ、と思い出しながら、しかし不思議なことに、あたりの風景はあのときのまま、おや、トンボまで飛んでいるよ。とそのときだった、空の奥から、なんとそのブーメランが、唸りあげて戻ってきたのは。彼は不意を突かれ、ブーメランに喉元を挟られてしまう。

昔の私が本を手にしたままたばこを灰皿でもみ消した。私は30代の半ばでたばこを吸うのをやめてしまったので、助かる。昔の私はそれから後ろのドアのほうに首を向けた。彼女がまだあらわれな

いので、ちょっと気になるのだろう。首をもとに戻したところで、

「本、読んでた？」と私はようやく話を切り出した。「処女航海」はピアノのアドリブのパートに入っている。昔の私は、黙って私の前に、シンプルな白い表紙の本を差し出した。『知覚の現象学Ⅰ』、モーリス・メルロ＝ポンティ。

「へえ、むずかしい本読んでるんだ」

「いや、そんなにむずかしくないですよ」

昔の私のはじめて言葉を発した。若者らしく幾分生意気な口のきき方だ。

「ほう」

「だってほら、知覚や身体が問題になってるでしょ、なんとなく感覚的にわかるんです、それと、世界というものがすでに固定されてあるのではなくて、自分のこの視線やこの腕のうごきによって刻々と作り直されていく感じ、それがすごくエキサイティングなんです」

「なるほど」

たしかに私は、大学入学時、漠然と哲学科志望だった。しかしすぐにそれは消えた。すでに詩を書き始めていて、詩には哲学以上に、抵抗しがたい魅力があるように思われた。私が三年時にすすんだのは、すでにもう詩人になりたくて、その思いと直結する日本文学科であった。詩人は自分の使用する言語、母語について深く究めなければならない。というのは全くの口実で、じっさいは外国語の成績が悪かったので、英文科や仏文科といった外国文学専攻に行けなかったのである。そののち、といっても10年近く経ってからのことだが、哲学史のうえではおよそ現象学とは対極になるようなジル・ドゥルーズあたりを読むようになり、それが私のほんとうの哲学書遍歴の出発だと思いなしてきたが、とすれば、『知覚の現象学』はその前史ということになる。それはどのようなものだったか、私のなかで逆に思い出してみたいという奇妙な好奇心が湧き起こってきた。

「ちょっといいかな」私は本を手に取りながら言った。

「どうぞ」

本を開いて目次をみると、たしかに知的刺激をかき立てるような章が並んでいる。とくに「第一部 身体」の「Ⅴ 性的存在としての身体」から「Ⅳ 表現としての身体と言葉」のあたりは、いままさに性的欲望のはけ口を見出しつつあり、同時にそして詩を書き始めてもいる昔の私にとっては、内容の如何にかかわらず読みたくなる章であろう。

ぱらぱらと本文をめくってゆくと、ところどころに傍線が引かれてあり、たしかに熱心に読んでいる跡が窺われた。

だが私は、30年以上もまえに読んだ『知覚の現象学』のことなどもうほとんど憶えていなかった。むしろさきほど実家の二階でみた『アサヒ芸能』臨時増刊との落差が面白かった。どちらがほんとうの昔の私なのか。ただ、『知覚の現象学』もスキャンダルネタも、身体が関係しているということではわずかながら共通しているといえるのかもしれない。それがまた一層おかしい。

「『知覚の現象学』を読みながら彼女を待っているのか」本をテーブルに戻しながら、私は尋ねた。

「キザだな」

「べつにそんな」

昔の私はすこしむくれたようにみえた。

「まあそれはともかく、やめておいたほうがいいと思う」

私は言葉の調子を少し変えて、生真面目なトーンで言った。

「えっ？」

「だからその、デートだよ。きみは手紙を書いてここに彼女を誘った。彼女は高校時代に知り合った一つ年下の子で、きみは自分に好意を持っていることを利用したんだ。でも、やめたほうがいいと思う」

昔の私の顔つきが変わった。一緒に悪戯をするつもりだったのに、途中で降りるなんてずるいじゃないか、とでも言いたげだった。私もなぜそんなことが口をすべって出たのか、よくわからなかった。さっき生家の二階の窓に映ったあの女の幻影、あれが作用したのだろうか。

「なんでそんなことを言う権利があんたにあるんだよ」

昔の私がすこし口をとがらせ、若者特有の苛立ちを込めて言った。それから、たばこを箱から取り出して口に咥え、ライターの火をそこに寄せた。たしかにそんな権利は私にない。昔の私の未来、ということは私の過去だが、それを変えることは私にはできない。もし変えてしまったら、いまの私は存在しないということになってしまうだろうから。だがおも私はつづけた。

「きみは性的な好奇心だけで彼女とつきあおうとしている」

「性的な好奇心？」

昔の私の口元が、侮蔑の感情の力でかすかに歪み、ひきつった。

「欲望でいいんじゃないですか、欲望で」

吐き捨てるように繰り返されたこの「欲望」という言葉は、はずみがついて、テーブルを越え床の方にどこまでも転がってゆくかに思われた。

「どっちでもいいが、とにかくきみは彼女をほんとうには愛していない」

「でも、愛とは欲望でしょ」

「いや、ちがう」

そう言ってから、私は口ごもった。とっさに置換すべき概念を思いつかなかったからだ。それから、たばこの煙が邪魔だというように、手で払う仕草をした。

「欲望は、なんかこう、欠如から始まるよね」と私は、時間稼ぎをするように、ゆっくりと思考を紡ぎ出した。昔の私もあいまいに頷いてみせる。

「そうして流れをつくり出す。主体から対象へと、あるいは対象から主体へと。愛はそうではない。愛はもっとあいまいな、もっと流れないような何かだ。そう、思いやりかもしれない」

「思いやり？」

昔の私が、またばかばかしいというように口元を歪めた。私には子供がいない。もし息子がいれば、ちょうどこんな感じで対峙するのだろうか。いや、もし父親と息子なら、もっとお互いに遠慮したり面倒くさがったりするだろうから、こんなにあげすけで芝居がかった対話にはならないのではないか。やはり私は昔の私と出会ったにすぎないのだ。

血の袋小路。父親になれないということは、私が私から解放されないということだ。だから昔の私に邂逅したりするのではないか。そうしてこれからも、私のなかを流れる血は、ほかの誰にも受け渡されず、まずまちががなく私のなかで終わる。ふとそんな暗い考えに襲われたが、しかしこのことは昔の私には伝えずにおこう。

それにしても、私自身ずいぶん陳腐な受け答えをしたものだと、やや遅れて思わず苦笑した。思いやり、か。昔の私のいうように、愛とは欲望だろう。より正確に言えば、欲望の費消であり、たとえばいうなら、潮が引いていったあとのむき出しにされた岩礁、あるいは溶けたバター、そう、溶けたバター……

「ぼくは彼女を欲望している」と昔の私は、私のくだらない連想ゲームを断ち切るように、議論を繋いだ。「彼女もそうかもしれない。それで十分じゃないですか」



「それが十分じゃないんだ」と私もなぜか執拗に絡む。「性的な好奇心がみたされたら、きみはぼろきれのように彼女を捨てる。そのために彼女は傷つき、不幸になり、きみもずっと罪悪感に悩まされる」

「ぼくが？」

「そう」

「まさか」

「いや、私が言うんだから、ほんとうだ」

さすがにこの言葉には説得力があったらしく、昔の私は戸惑ったように視線を宙に泳がせ、吸っていたたばこを揉み消した。

それからまた私たちは話をしなくなった。私はすこし言い過ぎたかもしれない。繰り返すが、愛が欲望であって悪いわけがない。昔の私と私とのあいだには、世界との関係の仕方にかんする違いがあるだけなのだ。昔の私の方がまだ自分のなかに世界をほぼまるごと抱え込んで、あれこれ動こうとしている。私はそうではない。世界のかなりの部分がすでに私の外に出てしまった。歳をとるとはそういうことだろう。

いや、ほんとうに私が昔の私に言いたかったことは、罪悪感ではない。ぼろきれのように彼女を捨ててしまったこと、百歩譲ってそれは仕方ない。しかし、そのまえに一度でも真剣に彼女を愛したことがあったらどうか。もしないとしたら、それはあまりにも侮蔑ではないか。彼女に対してだけではなく、自分自身の魂に対しても。

魂？ 思いやりにつづいて、またまた不思議な言葉が私から出た。もちろんそれはあくまでも私の内的独白のうちにとどめ、口には出さなかった。

窓からの光がテーブルに射していた。西日もかもしれないが、私にはどうしても朝の新鮮で強烈な陽光のように思われてならなかった。コーヒーカップや『知覚の現象学』のへりはハレーションを起こすほどのまぶしさで、テーブルの上のすべてがてらてらとその固有の色を失い、光そのものの実質と化したかのようにだった。いや、骨だ、光の骨だ。すべてはまばゆい光の骨と化し、テーブルの上で死んでいるように見えた。まもなく母も死ぬ。通夜と告別式を経て、焼き場で焼かれたのち、このテーブルの上のコーヒーカップや『知覚の現象学』のように、金属板にくずおれ散乱したまばゆい骨の集まりとして母は姿をあらわすだろう。

「お袋が危篤なんだ」

ようやく私は沈黙に終止符を打った。

「もっとも、きみにはまだずっと先の話だけどね」

「病気かなにか？」

「そりゃ、齢80だからね、病気にもなるさ。でもしばらくのあいだは、きみのお母さんは元気だ。彼女とも出くわして、あれこれ世話を焼く。ま、乞うご期待というところかな」

私は立ち上がり、「じゃあ」と昔の私に短く暇乞いをして歩き出した。こんなところでぐずぐずしてはいられないという思いが、ふたたび脳裏をかすめた。母が危篤なのだ。ゆっくりとドアのほうに向かう。昔の私はまた『知覚の現象学』のページをひらき、難しくはないというその哲学的言説を眼で辿りはじめただろうか。それとも欲望、いや性的好奇心がいまは頭を占めてしまって、それどころではないということだろうか。好きなようにせよ、好きなように。

とそのときだった。ドアが開いて、若い女があらわれた。彼女だった。目尻をまぶしそうにして、小鼻は細くすばまった感じ、そしてやや厚く前に出た下唇。髪はカールのかかったようなショートヘアで、エスニックな感じのニットのコートを着、ブーツを履いていた。私は通路をゆずり、彼女を

さきに通した。彼女は軽く会釈をして私の前を通り過ぎた。そのとき私の顔もちらっと見たはずだが、さすがに昔の私の四半世紀以上もあとの顔だとは気づかなかったようだ。そして忍び足のような例の歩き方で昔の私の席に向かった。それはまるで、たくさんの期待に押し出されつつも、わずかな不安がうしろから彼女の歩みをひきとめているかのようだった。そう、やがて不安は現実のものとなる。

もろもろの感情がこみあげてきて眩暈のようなものを感じながら、私は、彼女が開けたままにしたドアにもたれるようにして外に出た。それからドアを閉めた。とたんに真っ暗になった。階段があるはずだからと思い、慎重に足をすすめようとしたそのとき、呼び止められた。

「お客さん、そこトイレじゃありませんよ」

女の声なので、さきほどの埴輪の女だろうか。それにしてもひどい中国語の訛りがある。だがそんなことはどうでもいい。自分のいる場所に関して、私はあっけにとられてしまった。階段などあろうはずがない。私はカラオケスナック「京子」のフロアの奥まった暗がりには立っていて、そこからやや明るい店内のほうを覗くと、例の臙脂色のベルベッドの背もたれやカラオケ用のテレビやマイクスタンドがみえたが、未来の自分を認めたときの昔の私のように、まあこんなこともあるだろうというぐらいの認識しかはたらかなかった。

「閉店にしますけど」

こんどは訛りのない女の声に促されて、私は明るいカウンターのところまで行き、そこにいた正真正銘の埴輪の女に勘定を払った。時間を聞くと午前零時を少しまわったところだという。まさか。さきほどの光あふれた上階での昔の私との邂逅、常識的に考えればたしかにそれは驚くべき類のものだったとはいえ、時間にすれば、ちょうど「処女航海」の演奏時間ぐらいの尺の、10分かそこらのあいだの出来事だったはずである。残りの数時間はいったいどこへ消えてしまったのか。階段がなくなってしまったのと同様、わけがわからない。しかし、聞くようなことではないので、私はだまって財布をコートにしまい、女の体と女が開けてくれた扉とのすきまをくぐって、今度こそ夜の闇の中へと出た。

寒気がさすがに身にしみた。生家への道を急ぎながら、念のため携帯をコートのポケットから出して着信履歴を調べてみたが、新しい着信は記録されていなかった。母はまだこの世の人ようだった。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人、批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999年、高見順賞）、『よろこべ午後も脳だ』（2016年）、批評には、『オルフェウスの主題』（2008年）、『パラタクシス詩学』（共著、2021年）、『シュルレアリスムへの旅』（2022年）などがある。

\* 本連載は今回で最終回となります。ご愛読いただきありがとうございました。なお、本連載は単行本として小社より近日刊行の予定です。（編集部）